

第一節 樹木類

龍眼樹 [リエングエヌチウ]

龍眼樹は至るところにあり。主産地は嘉義地方および六甲支庁（※現在の台南市六甲区）・大目降支庁（※現在の台南市新化区）下にして、なかんずく金獅寮・緞厝寮（※いずれも現在の嘉義県竹崎郷）の山腹に多し。同地方は地味礫確（荒れはて）、斜面急にしてほとんど耕作に適せざれども、龍眼樹は野生にしてよく繁茂す。この樹は他の果物のごとく施肥その他の手数を要せず。その茂るに任せ、七八月頃実熟す。その大粒なるを福龍眼 [ホクリエングエン] といい、小なるを紐仔龍 [チウアアリエン] という。紐仔龍は品質良好なり。これを採り、一回に百斤（※一斤は約六百グラム）ほどカラのまま籠に入れ、硬質の小砂約一合を混し、強く揺振し表皮剥落して滑らかになりたるとき焙蒸炉に入れ火を加えて、一昼夜乾燥し取り出す。これを龍眼干 [リエングエンコア] といい、対岸支那に輸出す。またこの龍眼干の表皮を破り、核を去り肉を取り集む、これを龍眼肉 [リエングエンバア] と称す。共に食用・薬用として本島に需要せらるる他、支那に輸出す。包装の定量四十五斤にして一ヶ年各二十万斤を産出すという。

檳榔樹 [ヒエヌヌンチウ]

檳榔樹は南部地方に多し。植後五六年にして実を結ぶ。直径四五六寸より一尺ばかりに至り高さ二三丈におよぶものあり。枝なくして幹頭に葉あり、そのかたち雨傘のごとし。葉のかたち棕櫚に似て、葉の下に総（ふさ）をなして実を結ぶ。土人これを取って嚼む。杪（こずえ）端三尺くらいの芽を取り豚肉と煮て食するときはその味筍のごとし。

桑

桑は本島至るところに野生す。土人はもともと養蚕をなさず、いたずらにその繁茂に任す。ただしその実を摘み、百斤に塩十五斤の割をもって混和し、瓶に入れ三四日漬け置き、のち日光にて乾燥し、貯蔵して病後の滋養となす。これを桑垂 [スンスイ] という。

剥布子樹 [パクボオチイチウ]

剥布子は広東人は爛布子 [ラムブウツ]、台南にては補子 [ポオチイ] という。樹および葉のかたちは我が柿の樹に似て青色小指頭大の実を結ぶ。土人、実の黄熟するを待ちて摘採して塩漬けとなす。その味やや渋味あり副食物となす。この樹の皮を剥ぎ煮沸するときはその水黒色となる。なおこれを煎るときは黒膏状のものとなる。あたかも阿片のごとし。かつて苗栗の劉某なるもの、これを製し筒に入れ上に阿片小許（すこしばかり）を入れ、ひそかに陳某の家に置き、陳は阿片を密造せりと官に訴え誣告せることありしも、調査の結果罪に伏せり。この黒膏中、いかなる成分を含有しおるか、つまびらかならず。

相思樹 [シウシイチウ]

相思樹は豆科に属する植物にして広東人はこれを香糸樹という。その樹質堅硬にして車軸および舵輪を製した炭材とす。この樹は元南部台湾に限りて繁殖せしものにして今日のごとく中部北部に移植せしは五六十年を出ざるべしという。南部においても最も多きは恒春地方の各蕃社にして海面上約千尺以上のところに至るまで単純なる該樹の森林あり。牡丹社にはおよそ三十年ばかりの単純林あり。猪勝東社その他上十八社の附近は雑木に混成せる相思樹はなほだ多しという。その栽培法は種子を温湯に浸し直に苗床に落とし、発芽後数月にして苗木を掘り採り、根先と茎先とをきり捨て、林地に移植す。この法は極めて進歩せる栽培法なるをもって知識程度低き蕃人

等の自得し得べき理なきをもってあるいは原産地たる「フィジイ」群島より欧人の携え来たりて南部地方に伝えたるものならんかという。

相思樹の名称につき一伝説あり。昔夫婦の人あり相愛の情殊に深厚なりしが、時人その深契を知らず二人の死後ある河岸の両辺に各別に葬りしにほどなく墓の右辺にこの一樹を生じ左辺にその枝梢を伸ばし夫婦の墓を接続せしめしよりこれを相思樹と名づくという。余戯れに一詩をなすいわく、「深契連枝比翼情、時人不識隔河塋、墓辺老樹垂過水、因有呼伝此美名」。

紅棗 [アンソヲ] および棗仔 [ソヲアア]

紅棗は我が棗にして北部に多く中南部に稀なり。南部においては棗仔と称する青棗多し。その葉棗に似てややひろくして光沢なし。樹また葉に似たるも刺少なし。実は棗よりも丸くして熟するときは黄色を呈し、味棗に似たるも美味ならず。一二月頃成熟し我が棗に比し豊産なり。

指甲花 [ツンカアホエ] ※ヘナ (髪の色で知られる)

指甲花はその葉樹ともに石榴に似て花は総(ふさ)をなし多数の小白花を開く。土人女子これを取って髪の色となしその葉を摘み塩を和して爪を染む。その色赤紅色を呈すゆえにその名あり。

木綿

木綿は土語にして班綿 [バヌミ] または班芝 [バヌチイ] という。南部地方にあり。殊に蕃薯寮地方(※現在の高尾市旗山区)に野生す。喬木にして花黄色、そのかたち槿花に似たり。実は肝臓大にして青色、熟すれば殻開けて綿を出し、風に従って飛ぶ。あたかも柳絮のごとし。人そのいまだ破れざる前摘採して被に入れ使用す。ただしその収穫少なくして収支相償わずという。

茉莉花 [ボクニイホエ] ※ジャスミン

茉莉花は葉小にして丈三四尺の灌木なり。その花は製茶の香料に用いる。また婦人は好んで頭髪の色となす。台北においてはこれを栽培す。その植付甲数二百三十九甲四分に及ぶという。

桂花 [クイホエ]

桂花とは木犀(もくせい)なり。桂花に金色と銀色とあり。共に香気高し。本島婦人は頭髪の色となす。

黄枝 [シンキイ]

黄枝は山梔(くちなし)なり。茶の香料となし、また婦人は頭髪の色となし、実は染料となす。台北府下においてはこれを栽培す。その植付甲数数百零五甲余なりという。

馬茶花 [ベエテエホエ]

馬茶花はその樹および葉は黄枝に似たるも、花小にして六七弁ずつ出す。これまた婦人頭髪の色となす。

烏子仔 [オオチイアア]

烏子仔は蔓状の木にして、その葉あたかも金龜樹に似たり。土人これを植えて籬(まがき)の代用となす。葉間に黒き実を結ぶ。故にその名あるゆえなり。

枸杞 [コオキイ]

枸杞は蔓のごとく交纏せる灌木なり。葉小にして小紫色の花を開く（花は「スマレ」に似たり）。葉を摘んで食するときは眼力を強くすという。

秀英 [シウイエン] ※ジャスミンの一種

秀英はその花を香料に用うるものにして、茶商は多くこれを用う。台北においてこれを栽培し、その植附面積百五十四甲九分一厘（※甲子園球場約四十個分に相当）ありという。もって共需用（ニーズ）の如何を察すべし。

茶 [チエ]

茶は北中部に多し。殊に台北・桃園・新竹は有名なる産地にして、大稻埕には大なる製茶業および大洋行（問屋）あり。茶には烏龍茶・包種茶・紅茶・緑茶等あり。烏龍茶は主として欧米に輸出し、包種茶は南洋および印度に、紅茶緑茶は米國に輸出す。全島の植附面積は四四三六甲七七（※甲子園球場約千百余个分に相当）なりといえ、これ本島の主たる産物なり。

佛手柑

佛手柑はその実あたかも掌をゆるく握りてまさに開かんとするかたちのごとし。色黄色にして二合コップ大なるものあり。香気すこぶる高し。本島においては蜜餞となし、または神仏等に供す。

油桐

油桐は本島南部に野生し、土人田端の籬（※境界）の代用とす。その枝を切り挿す時は必ず生く、この実より油桐を製す。桐油四斤（※一斤は約六百グラム）生成蠣殻灰十九斤とを混じ、臼にて搗き「桐油灰」を製す。船およびおけるいの罅隙（すきま）を塞ぐに用う。

木瓜 [ボクコエ]

木瓜は『本草綱目』にいわゆる「蕃木瓜」なり。『群芳譜』には鉄脚樹という。蕃瓜樹科に属する植物にして、全島至るところに産すといえども、最も中南・東部に多し。概して栽植にして野生なし。年中随時に花開き、実を結ぶ。内地においては沖縄に産す。この植物に雄木雌木あり。ともに一茎にして枝なし（その芽を摘断すれば枝数支を生ず）、幼木にあつてはその雄雌を区別し難く、丈五六尺の高さに至り長き花梗を出し、淡黄白色の小なる花開くは雄木にして、葉腋ごとに親指大の白花を開くはこれ雌木なり。雌木に実を結ぶ。その色青く形倒卵状にして大なるものは直径七八寸に至る。成熟すれば黄橙色を帯び、肉内に黒色小豆大の種子あり。味甜瓜のごとし。その未熟なるものは皮を剥き、糠漬け・味噌漬け・塩漬けとなし、また肉類と煮て食すれば消化を助け、かつ滋養ありという。これを栽培せんとせば、まずその種子を蒔き、のち十日にして発芽し約一ヶ月にして五六寸となる。時々施肥せば成長速やかなり。これを移植して半年にして五六尺となり、果実を結ぶ一か年結実約十五六個より二十五六個に及ぶ。樹の高さ大なるものは四五間に至り直径二尺余に及ぶものあり。本島人はこれを食するときはよく足疾を療すという。その茎も柔軟なところは煮食すべく雄木は苦味多きも調理を加うれば風味淡佳なり。また「パパアヤン」はこれより製した木瓜糖を製す。木瓜の支那に知られしは久しくして、すでにその名『爾雅』および『周礼』にも見え、孔子も「吾於木瓜見苞苴礼」と言えり。『晋官閣』に「華林園木瓜五株」と、また『明皇雜録』に「楊後思食酸味。明皇以告張説。因進経袖出木瓜献」とその他木瓜のことを載せたる書すこぶる多し。余

また木瓜を愛す。余一詩ありいわく、「傘蓋半天冲。珠球累緑紅。朝晡迎我意、秋雨又春風」と彼の范大成の『詠木瓜』の詩に曰く、「沈々黛色濃、粼粼金沙綯、却笑宜州戾、競作紅粧面」とまた木瓜を愛するの人なりしか。

ペルビアン

ペルビアンはその葉「シーアイラント」(米国綿)に酷似せるものにして、恒春方面に在来よりありし。その種にして本島気候に慣化せるをもって将来有望なる植物なり。

香楠 ※タブノキ

香楠は樟科植物に属するものにしてその樹皮を取り、極めて薄く紙状に削り、これを水に浸すときは粘液を生ず。この粘液を採りて婦人の頭髮に塗るきは光沢ありて我が「鬢付」と同一効用をなす。そうしてまた油質なきをもって健康上に利あり。また「落花楠 [ロクビイラム]」その他同科樹木外皮のよりもこれを製するを得、土人既製品を粘芝 [リアサア] という。

波羅蜜 [ボヲロオビツ] ※ジャックフルーツ

波羅蜜は桑科に属する植物の果実にして、英語の「チアクフルーツ」支那人は「優鉢曇(うどんげ)」という。台湾南部・大目降・関帝廟・蕃薯寮の地方にあり。その実は七八月頃成熟し大きき斗(※一斗ます)のごとし。皮熱軟枝あり。肉は数十房にわかれ、蓮弁のごとく抱生し、その色黄にして味は甘し。房ごとにそれぞれ核あり。その核色白くして煮て食うべし。味栗のごとし。この樹は幹・枝・根ともに結実す。刀をもって樹皮を切れば白乳湧出し、すなわち果実を結ぶ。故に一名「刀生果 [トオセイクワ]」という。『赤嵌筆談』に曰く、「生じて五六年、径尺に至る。その梢を削去し、銀鍼を以て腰に釘す。即ち結実す。成実の花、しかるに花(実を)作さず。故に仏氏、優曇華花を以て得難しとなす。毎樹多実数十実。根より幹に至る。しかるに枝條皆実有り。累々にして瘤贅なり。もし実なさざれば即ち刀を以て樹皮を砍(き)る。白乳湧出あり。凝って流れずすなわち実一砍(きり)一実。十砍十実。故に一名を刀生果」とあり、ゆえに世俗「ウドンゲ」の花といえるはこれを指せるものの如し、『台湾府志』に和蘭(オランダ)より移来すといひ、また、『赤嵌筆談』には、「南海廟中もと東西二林あり、高さ三四丈、葉は頻婆の如くして光潤あり。蕭梁の時、西域達奚司空の植ゆる所、他の有る所皆此より分種す」といふ。

牛心梨 [グウシムレエ] ※カスタードアップル

牛心梨はその葉栗のごとくして牛の心臓大の実を結ぶ。その味甘くして、釈迦頭の味に似たり。大目降(※現在の台南市新化区)および台南にあるものはなほだ稀有なり。今台南法院中庭にあるものすなわちこれなり。

麵包果 [パンノキ]

麵包果は波羅蜜の一種にしてこれ印度諸邦および南洋諸島の熱帯地方にあり。土人これを焼焙しパンの代用とするをもって名あり。台湾は花蓮港以南璞石閣(※現在の花蓮県玉里郷)に至る間の『アミス』蕃社(※アミ族)に広く栽植せられ、宜蘭利沢簡海辺の平埔蕃部落にも少数を見、また紅頭嶼(※現在の蘭嶼)においては全部自生し同島山林の主木をなし、その実七八月頃成熟す。果実核子ともに食うべし。

釈迦頭 [シエクキアタウ]

釈迦頭は蕃荔枝に属する植物にして台湾南部地方にのみ栽植せられ、その実こぶし大にして碧色縹瘤(ちじんだこぶ)あり。あたかも釈迦仏の頭のごとし、ゆえにこの名あり。八九月頃成熟す。味甜くして膩(あぶらこく)か

つ微酸あり。もともと和蘭（オランダ）より来たりしものなりといい伝う。ゆえに一名『蕃梨』の名あり。沈光文の詩に「称名頗似是誇人。不是中原大谷珍。端為上林栽未得。只应海島作安身」、すなわち釈迦頭を詠じたるものなり。

山龍眼 [ソアギエンキエン] ※ロンコン

山龍眼は龍眼の一種にして普通龍眼と別種なり。東部璞石閣（※現在の玉里）以北の蕃地に多く栽培せられ、『アミス』蕃族は『イオール』と呼ぶ。普通龍眼に比すれば更に美味なり。遠く『フィジイ』島に産するものと同一なりという。

荔枝 [レエチイ]

荔枝は無患樹科に属する植物にして龍眼と同族なり。外形龍眼樹と鑑別しがたし。果実四五月頃成熟し龍眼に比すれば大粒なり。果肉漿液多くして甜美なり。南部支那は主産地にして台湾至るところに少数ずつ栽植せり。支那産に比して劣等なるがゆえに栽植するもの少しという。支那人はことにこれを愛賞す。かの楊貴妃の荔枝における蘇軾の「日啖荔枝三百顆（一日に荔枝を三百子食べる）」のごときその有名なるものなり。

蓮霧 [リエンプウ]

蓮霧は南部地方に多く五六月頃実を結ぶ。紅白色にして光沢あり。かたちは衡錘（はかりのおもり）のごとく、その味林檎に似たり。成熟過ぐる二三日に至れば果肉中に白蛆を生じ、食うあたわず。

那拔 [ナアポアツ] ※グアバ

那拔は台湾至るところにあり。樹皮は百日紅のごとく滑らかにして花は白梅花に似たれども香気なし。実はあたかも内地の無花果のごとくにして土人は皮肉ともに食す。まだ熟せざるものは皮を剥きて食し、また塩漬けとなして用う。

楊莓 [イウトオ] ※スターフルーツ

楊莓は金龜樹に似たる樹なり。その実は太き拳大、五角にして嚙咤（※刑具の一種）のごとし。これを横切すれば星章形をなす。熟すれば黄色となり、その実酸渋なるものと甘酸なるものとあり。土人これを生食し、また塩漬、砂糖漬となして食す。

様仔 [ソアイアア] ※土マンゴー

様仔はその葉榿の葉に似たり。五六月頃に至れば実成熟す。その大きさ腎臓大にして青黄色なり。皮を剥きてその肉を食す。その味甜酸にして美味芳香あり。またこの果肉を干し又は砂糖漬けとして食す。南部至るところにあり。

蜜柑

本島の蜜柑はその種類異なるに従って風味を異にす。その種類左のごとし。

- 一、 椪柑（ポンカン）または凸柑という。椪柑は十二月頃成熟す。味甜酸にして漿液最も多く剥皮は容易にして本島蜜柑中最も上品のものなり。樹性乾燥地に適し、湿地に植ゆれば枯るという。
- 二、 雪柑。または西仔柑という。雪柑は味甘酸にして剥皮難く小刀を用う。十一月下旬に至れば成熟し、果実なお木にある間に次年の花を開くものにして最も貯蔵に適し結実豊産なり。
- 三、 桶柑（タンカン）。桶柑は十二月月上旬成熟し果実木にありてまた花開く。味甘酸にして稀薄その全部黄赤色を呈するに至れば酸味去り甘味のみとなる。水害少なきをもって結構豊産なり。

四、紅柑。紅柑は甘酸なるも稀薄なり。漿液多くして脱皮易し。十二月中成熟し貯蔵に適せず。その実を砂糖に煮て柑餅を製す。

柚仔 [ユウアア]

柚仔は、すなわち朱欒（ザボン）にして大斗柚・中斗柚・文旦柚等あり。大斗柚とは形大きくかつ円形にして紅肉なり。中斗柚は中形にして円く白肉なるもの。文旦柚は小にして尖円形をなせるものにして皮薄く味最も佳なり。ともに九月頃成熟す。白肉のもの最もよしとす。栽培は接木の苗を用い、四年にして結実するもの多からず、十年以上のもの結実多し。実は生食のほか砂糖漬となす。

樟

樟は台湾蕃山にあり。幹または根を削りて蒸し、その水蒸気を集めて急に冷却せしめ樟腦および樟腦油を製す。台湾総督府においては樟葉をもって樟腦を製しつつあり。樟腦は本島産物の主たるものにして世界全産額の八分の一は台湾より出ずという。今総督府においてこれを専売す。

楠

楠もまた蕃地にあり。樟腦を製するあたわず。木材および板として家具を作る。その価廉ならず。

茄苳 [カアタヌ] ※アカギ

茄苳は、阿猴（現在の屏東県）庁下および蕃界に多し。その質堅牢にして家具および諸材に適す。

苦楝 [センダン]

苦楝、土名苦苓といい、南部地方至るところに繁茂す。各地道路の両側立木として植え、春に至れば紫雲爛漫として沿道溝堤・河岸・廟祠・その他ところどころに満ち壯觀を呈す。土人は木材・下駄および新炭となす。その花満開なるときは実に内地の藤花を凌ぐの感あり。（後略）

菊花木

菊花木は一種の葛質にして蕃山にあり。これを横断するときはその目、菊花に似たり。ゆえにその名あり。これを用いて茶托・花挿・煙草盆等の器を作る。

金龜樹 [キムクウチウ]

金龜樹は南部に多し。葉小にして幹枝屈曲最も庭木に適す。台南・阿猴（現在の屏東県）等の公園・街路・廟前・庭園に植ゆ。

玉蘭 [キエクラヌ]

玉蘭はその葉様仔（マンゴー）に似て、花は白色、形金針花のごとくにして香気多し。土人婦女子好んで花簪に用い、また宴席等の飾花となす。

樹蘭

含蘭は葉つげに似て、花は細粒黄色香気強し。玉蘭花と同じく婦人これを愛して頭に挿す。

含笑 [ハムシアウ] **および夜合** [ヤアハブイ] **鷹爪** [エンジャウ]

樹笑・夜合・鷹爪ともにその花香気高し。これまた婦人花かんざしに用う。

椶葉樹 [コエヒオチウ]

椶葉樹は土語にして一種の青桐様の樹なり。海岸または海埔の鹹地に生ず。その花黄色にして形芙蓉に似たり。土人この葉を採って、椶（餅）を包むゆえにこの名あり。

柏仔樹 [キンガチウ]

柏仔樹とはナンキンハゼまたはトウハゼといい、大戟科に属する半喬木（※そこそこに高い木）にして本島至るところの山野に野生せり。本来亜熱帯的支那植物にしてかの地にては古来より蠟を製しあたかも我がハゼノキのごとし。

我が国にては沖縄および鹿児島にありて支那より移植せしものなりという。藩主・島津重豪より齊彬の時代において植育を奨励せしことありという。本島においてもこれを奨励せば大に有望なる産業というべし。

榕樹 ※ガジュマル

榕樹は全島至るところにあり。なかんずく南部地方に多し。幹根ともに屈曲あたかも龍の蟠居するがごとし。また幹枝より根を生じ地に垂れ着けば生きて幹となる。その葉密生して四辺を陰す。真に熱帯地における清涼地をなす必要樹というべし。

蔦菘 [チアウチエン] ※マタタビの一種

蔦菘全島至るところにあり。中南部は最も多しとなす。その幹根は榕樹に似て幹より根を生ず。葉は様仔（マンゴー）に似たり。猫（山猫）この樹の実を好む。土人この樹の下に罾してこれを捕らう。また台湾の一奇木を失わず。

茄苳 [カアエア] ※マングローブの一種

茄苳は海岸潮の去来するところまたは鹹水魚塭堤防等に繁茂す。もし陸地に移植すれば枯死す。その葉椿にては丈四五尺に達す。これまた台湾の一奇木なり。

猩猩木 ※ポインセチア

猩猩木は全島至るところにあり。花黄色小粒にして周囲の葉紅色にしてあたかも花卉の代用をなす。かの「イカダ蔓」とともに植物研究の好材料たり。

橄欖 [カンナア] ※オリーブ

橄欖は「オリーブ油」の樹にして嘉義地方に多し。その実は塩漬けとなして食す。かの干物店または鹹酸甜の売りゆくものすなわちこれなり。

蘋婆 [ピンボン] ※ピンボンノキ

蘋婆はその葉梨に似て実はあたかも桃のごとく、実を烘食（焼いて食べる）すれば味栗のごとし。これまた台湾の一奇果たるを免れず。

神木

嘉義阿里山に千年以上を経たる檜樹数万本あり。その中直径二十一尺、高二十八間余、材積千五百尺^ノと推定せらるるものあり。その齡二千年以上のものなりという。人呼んで親睦と称す。真に稀有の大檜樹というべし。

以上のほか、松蘿・油杉・百日青・山杉・油松・杜・松柏・赤柯・校欖・赤狗・柯仔・紅維油・烏心石・桐・青桐・欖仁・鷄角公・山黄麻・楓・毛柿・烏皮石・石荅・蘭梓木・肉桂等あり。他は内地のものと異なるところなければこれを省略す。

第二節 草蔓類

甘蔗 [カムチア] ※サトウキビ

甘蔗は全島至るところに産す。その在来種の種類およそ三種あり。いわく、一 紅蔗、二 蠟蔗、三 竹蔗 なり。紅蔗は、外皮滑沢にして紅紫色を帯び、成熟すれば暗紅紫色を呈す。茎の外部は剛硬にして脆く甘味強けれども当分比較的少量なり。また節間短く茎径六七分風害虫害に罹りやすくまた土地の卑湿あるいは乾燥に過ぐるを忌む。蠟蔗は、茎青、褐色を帯び熟するに従い青色を減じ、褐黄色を加えややべつ甲色を呈し、外皮滑らかにしてこれに触ればあたかも蠟に接触するがごとき感あり。風雨の害に弱く茎はなはだ折れやすし。

竹蔗は茎細昌にして節隆起し成熟すれば褐青色を帯び外皮粗剛にして葉状色沢ほとんど竹に似たり。風害に耐え旱雨の害を受くること少なし。

以上の三種の中最も広く栽培せらるるは竹蔗にして蠟蔗これに次ぐ。紅蔗は南部地方の少区域において製糖用として栽培せらるるも北部においてはこれを噛みて翫味の用に供するのみ。従来「糖部（製糖所）」なるものを設けて製糖をなしたりしも、近来に至り各地に大製糖会社を設立し盛んに改良種を栽培して製糖せり。去る大正五年（西暦一九一六年）七月より大正六年六月に至る全島における収穫面積は一一四、四五〇甲九分一厘（※東京都の半分の広さに相当）にしてその収穫五、七三五、二一九、〇三三斤（※約三四〇〇トン）なり。もっていかに本島の甘蔗が主たる産物なるかを推察するに難しからず。

菁 [チイ]

菁はすなわち藍にしてその種類左のごとし。

大菁 [トアチイ] は山藍にして本島北部に最も多く中南部に少なし。山地は蕃界に接したる土地にして北部は台北文山県・宜蘭頭頂県（※現在の頭城鎮）・嘉義大棟榔西堡（※現在の嘉義県朴子市）をもって著名なりとす。大菁は強烈なる日光の直射を嫌忌するをもってこれを避けんがためおおむね山間傾斜の地に栽培す。

木菁 [ボクチイ] は木藍にして荳（まめ）科に属する植物なり。全島至るところに産し、なかんずく著名なるは台北擺接堡（※現在の新北市板橋区）・文山堡、中部は苗栗一堡、南部にありては台南永康上中里、嘉義大棟榔西堡とす。木菁に二種あり、一は小菁 [シアチイ] といい、一は大菁 [トアチイ] という。ともに四月のい播種し周年六月および九月頃収穫し藍を製造す。藍に泥藍および藍靛（※かたまり）の二種あり。

泥藍を製するには、まず大なる桶（六尺径くらい）に菁の葉茎ともに入れて充満せしめ、水を満たし石灰を混じり約一週間放置するときは、葉はことごとく茎より落ち、その水緑色を呈し泡沫浮き出す。このとき茎を取り除き攪拌し沈澄せしむ。沈澄ののち栓を抜きて上澄水を去り地上に設けたる方形の沈殿池（コンクリートをもって塗り、深さおよそ三尺五寸、長さ・幅は適宜とす）に移し、再び上澄水を去り、四五日間乾燥して表面少しく亀裂を生ずるを待ちてこれを器物に移す。乾燥過ぐれば色沢を悪変するの憂あり。藍分を沈殿せしむるため投入する石灰の量は生茎葉千斤（※一斤は約六百グラム）に対し四千斤内外にして約百斤ないし百十二斤の泥藍を得、また藍靛製造は総督府において奨励中に係るもいまだ全島至るところ広くこれを行うに至らず。もし盛んにこれを製造せば運搬その他に利益多きをもって大に有望なりというべし。

苧麻 [エモア]

苧麻はすなわち麻にして全島至るところに産す。北部・中部に多く殊に新竹苗栗を著名の産地とす。また蕃界においては蕃人自生のものを採りて麻を製す。南部地方は旧六・八・十月の三期に、北部は四・六・八・十月の四期に採取す。第一期は収量豊饒にして品質また佳良なりという。一カ年の産額約三百万斤にして対岸の汕頭（スワト

ウ)に輸出す。同地においてはこれをもって、唐苧布(クラヌクロス)と称するものを製す。本島においては漁網・網索等に用いらるのみ。

黄麻 [シンモア]

黄麻もまた麻にして全島至るところに産す。その繊維粗剛にして機織に適せず。ゆえに大部分は索網・布袋(米袋)・麻衣等の原料となる。一カ年の収額百五十万斤内外なるも苧麻のごとく輸出額多からずという。

薯榔 [ツウヌン]

薯榔は一種の蔓にしてその根に茎あり。あたかも山芋の大なるものに似たり。土人これを掘りて染料となす。その色赤黄色にして布および漁網等を染む。

荖葉 [ロオヒオ]

荖は一種の蔓類にして土人この葉を採りて檳榔子を包みて嚼む。その栽培は多く、檳榔樹に纏着せしめてこれを培う。

樹豆 [チウタウ]

樹豆はその葉麻のごとくにして丈三四尺、土人これを畑に間作す。その実豆のごとく、たねは小豆に似たり。これを以て砂糖を加え食するときは腸を健ならしめ熱を去るといふ。脚気病者この小豆のみまたは飯に加えて食するときは日ならずして癒ゆといふ。

田菁 [サヌチイ]

田菁はその葉箒草に似たり。茎は小指大にして丈七八尺、土人は田畑の瘦せたるとき田菁を蒔く。田菁成熟して葉枯死し落ちて肥料となるという。またいまだ熟せざるに先ち刈倒して緑肥となすものあり。その熟したる茎は刈り取って薪となす。故に田菁の実は高値に売買せらる。

卑麻 [ピイモア]

卑麻は全島至るところに野生す。最も中南部の河岸・溝堤・路辺に繁茂す。この実を採って油を搾出して、卑麻子油(ひましゆ)を製す。

魚籐 [ヒイチエヌ]

魚籐は多く蕃地に接したる所にあり。あたかも藤に似たる植物にして有毒なり。蕃人はこの根を掘って河川に投げ魚を麻痺せしめて捕う。土人またこれを用いて人を害するものあり。

鳥面馬草 [オオピヌベエサウ]

鳥面馬草は一種の蔓にしてその葉を採りて体に揉みつくるときは青黒色となり、あたかも殴打せし傷跡のごとし。ゆえに土人往々これを用いて他人を誣告することあり。

龍船花 [リエヌツウホエ] ※シマヒギリ

龍船花は本島至るところにあり。もともと中南部に多し。その葉深緑色にしてかたち瓜の葉に似たり。花は真紅に

して小なり、南部の土人五月五日にこれを採りて菖蒲・蓬・榕枝（ようじ）とともに櫓（のき）端に挿す。

蒜および菹

蒜および菹は別に奇草に非ざるも本島人はすこぶるこれを好嗜しすべて日常の料理にこれを加えて食し、もって瘟疫を払うとなす。

虎尾蘭 [コビラヌ] ※サンセベリア

虎尾草は至るところにあり。元澎湖の産なりといい伝う。葉は青色にして萬年青に似て白斑あり。そのかたち虎尾のごとし。故に土人これを虎尾と名づく。生花材料に好適す。

文殊蘭

文殊蘭は一名「ハマオモト」といい、そのかたち我が萬年青に似たり。全島の山野至るところにあり。これまた生花の材料に適す。

胡蝶蘭

胡蝶蘭は恆春庁下の蕃地にあり。多く樹上に生ず。その葉厚く匙状をなしほとんど相対して生じ、二葉より八九葉に至る。中央より茎を生じて白花を開く。真に清雅なり。その樹上にあるのかたち、あたかも胡蝶の止まれるのごとし。ゆえにこの名あるゆえんなり。

月来香 [コエライヒオン]

月来香は畑に栽培す。その葉は金針のごとく司法に分垂す。中央より茎を出して白花を開く。月出ずれば香气増す。ゆえにこの名あるゆえんにして土人婦人好んで頭髮の飾りとなす。

蓮蕉花 [リエヌテアウホエ] ※カンナ

蓮蕉花はその丈三四尺、葉芭蕉に似たり。紅または黄の花を開く。土人祝日等の贈物となす。

クロトン

「クロトン」は園芸植物にしてその葉紅あり、青あり、黄あり、白あり、金あり、銀あり、斑あり、各色混じたる種々の色ありて各種を挙ぐるはその繁に耐えざるをもってこれを略す。主として南部に多く土地肥饒なるところはその色美麗なりとす。

紅竹 [アマチエク] ※センネンボク

紅竹はその葉紅色にして大なるは茎径一寸余にしてその先に蘭状の葉あり。その色紅色ゆえにこの名あり（この種二種あり、一は同種にしてその葉青色なるあり）。紅色のものも内地に移植し一冬寒さに遭うときは青色に化すという（※萬年青のこと）。

埔姜 [ポウキウ] ※ニンジンボク

埔姜とは樹豆とその葉その茎ほとんど相同じ、ただその葉の対生と互生とによってこれを判別するを得、埔姜は田畑の生籬に用いた薪となす。

緑珊瑚

緑珊瑚は南台湾に多し。布袋嘴、北門嶼その地海辺に多く、幹あり、枝あり、葉なくしてその幹枝緑色、これを切れば白液を出す。もし身体に塗ればすこぶる痒感を覚ゆ。そうしてこの液は護謨（ゴム）の性分を帯びるといふ。

奇藍 [キイラヌ] ※サボテン

奇藍とは我が千人掌なり。奇藍に種々あり枚挙にいとまあらず、六角奇藍・四角奇藍・三角奇藍・火炎・壁蓮・千人掌その他種々あり、土人はこれを植えて墻の代わりに用う。六角奇藍は下熟剤となす。

草培子 [サウボエチイ]

南部地方の池底に自生す。土名馬子葱と称する黄の球根にして毎年十一月以後水の涸れたるとき掘り日光に乾かし食用とす。その味滋菇（じこ。きのこのこと）のごとし。

金線蓮 [キムソエアリアヌ]

金線蓮は深山中に生じ、その産額多からず。本島人は強壯剤として（これ）を用（もち）う。金線蓮一匁につき豚肉二等十匁酒三合水一合の割合にて煮て食するものなり。

藻玉

藻玉は土名「ロアテンチイ」と称す。蕃地に産し、殊に蕃薯寮方面に多し。印籠・楊枝入れ・根付けを製す。

竜舌蘭 [リウセツラヌ]

竜舌蘭は石蒜（ひがんばん）科にして一名萬年蘭と称し、また竜舌草という。葉は多肉長形にして尖り針状鋸歯を有す。花茎は葉叢の中央より四五間に冲立し、あたかも帆柱のごとし。そうして多数の花を着く。彼の「サイザルヘンプ」に似たり。その繊維を取り、織物および抄紙を製す。

サイザルヘンプ

「サイザルヘンプ」は石蒜（ひがんばん）科植物にして、「マニラロツブ（※マニラローブ）」その他繊維を工業用となす。今阿猴（現在の屏東県）庁下においてこの栽培を奨励し、また本島南部に好適せる植物なりといふ。

蘭草 ※いぐさ

蘭草は全島至るところにあり。これをもって帽・草蓆・煙草入その他種々の器を製す。ゆえに大甲はその名ももっとも高し。嘉義・台南・阿猴の三庁においてその植付甲数三百六十九甲にして収穫四十六万九千斤なりといふをみれば、全島における一般を推知するに足る。

蕃薯 [ハヌツウ] ※さつまいも

蕃薯はすなわち甘庶（さつまいも）にして全島人民の主食物の一なり。ゆえに至るところに栽（う）ゆ。単に嘉義・台南・阿猴の三庁の植付甲数を見るに一箇年五七二六六甲にして収穫八〇三〇〇八七一〇斤なり。もってその全頭の産額をうかがうに足る。

落花生

落花生はまた全島至るところの農夫これを植ゆ。その子(たね)は搾りて油となすほか、菓子の材料および間食に用い、また対岸に輸出す。南部台湾のみにおいてもその植付甲数一〇三二六甲にして収穫七八八七四石なりという。もって全島を推知するに足る。

大小麦

大麦・小麦は本島において多からず。しかれども全島至るところに栽える。南部台湾においてある年度の植付甲数五五七八甲にして収穫二六九七六石なりという。

油葱 [イウサン]

油葱または蘆花という。一見太葱のごとくして刺(とげ)あり。土人鉢に植え牆壁上に置く。この茎の液を採って器に入れこれを頭髮に塗るときは毛髪光沢ありて臭気なしという。

風葱 [ホンサン]

風葱は葱の一種にして一見普通の葱と異ならず。ただ茎太く長く茎面に白粉を付着す。土人は鉢に植えて珍重す。感冒に罹りたる際これを煎じ飲むときはただちに癒ゆという。

慧苡 [ヨクイ] ※はとむぎ

慧苡は我が「カラスムギ」にしてこれを植えてその実を採り、白にて舂き精白となし、これを煮、砂糖を和して食す。腸を整うるものなりという。我が国においてもこの実を煮て食する時は盲腸を癒やすという。

接骨牡丹 [チアブクツボヲタヌ] ※デンマークカクタス

接骨牡丹はいわゆる蟹蘭なり。土人この枝を採り摩壁蓮または三角奇藍の幹を八寸くらいに切りてこれに接ぐときはこの枝すなわち接生して時に至らば花を開く。花桃色にして美麗なり。

芙蓉 [ウイオン] ※フヨウ、ムクゲ

芙蓉は土名なり。一見菊のごとくにして葉小なれども蓬に似たり。葉は銀白色にして黄色の花を開く。婦女子の頭髮の飾りに用いる。

五猫龍 [ゴオミアウリエン] ※ジャノヒゲ

五猫龍は茎葱のごとく、葉は肉熱くして狭く叉をなし五指を開きたるがごときかたちをなす。その葉互いに繁りあたかも龍の戯るるに似たり。ゆえにその名あるゆえんなり。土人はこれを盆栽花となす。

隨香蔓 [スイヒウチエヌ] ※不明

隨香蔓は一種の蔓にしてその葉朝顔のごとくなるも小なり。花は香気あり。土人婦女子これを摘みて頭髮の飾りとなす。

山棕 [ソアサヌ] ※クロツグ

山棕は本島至るところの山地にあり。かたち蘇鉄のごとくその葉および茎長し。茎は杖となすべく、葉は草蓆(く

さごや)等の屋根に用いる。

蛇木 [ジヤボク]

蛇木はその草蛇紋あるをもって名づく。全島至るところの山地に生ず。その葉薇(ぜんまい)に似て枝なく径二尺・丈一丈余におよぶものあり。これをもって柱を造りまた削りて筆筒および花瓶を造る。ゆえに一名筆筒樹の名あり。

椰樹 [イアウ] ※椰子

椰樹とは山棕櫚(しゅろ)に似たるものにして棕櫚科に属する植物なり。斗大の実を結ぶ果肉は生食して滋養あり。また乾燥して石鹼蠟油の原料となし、幹は堅にして建築材に適し、茶の間床柱等に造り雅致あり。果漿は夏時の飲料に適し、果殻は飲食器の類を造るべく、葉は家屋の屋根となり、果皮の繊維は縄および糸となし、織りて靴拭または廊下の敷物となす。また外皮は蓑および笠を作るべし。往時より南部台湾に多し。今紅頭嶼(※蘭嶼)に叢林ありという。

姜黄 [キウウン] ※ウコン

姜黄は薑荷(ミョウガ)科植物にして、一二月頃山地に植え付け翌年一、二月に至り根を採掘しこれを熟煮し篩(ふるい)に掛け雑物を去り麻布袋に入れて販売す。これ染料薬料に用い本島においては紙および布を染めまた輸出品として「カレー粉」の着色に用い、その他支那の煙草に混和す。主産地は蕃薯寮噍吧岬(※現在の台南市玉井区)となす。

芭蕉 ※バナナ

芭蕉は人のすでに知るところにして説明を要せず。台湾至るところの地にあり。また雄雌あり。雄の実は食うあたわず。ただこの幹より煥油を製しまた繊維を取りて布を織る。雌は実を結びその味甜美なり。余常に芭蕉を愛す。一詩ありいわく、「潤葉新晴 四面に開き、蕉花散落し青苔に点ず、陶然として独り酔う南窓の下、時に雨声は詩興催すあり」。

イカタカヅラ ※ブーゲンビリア

「イカタカヅラ」は全島至るところにあり。一種の蔓にして小葉密生し、亭および門等の天井をなさしむ。その花紫紅色にして花の周囲の葉は変じて花卉の代わりをなす。これまた狸々木とともに植物研究上の好材料なり。

月桃草 [コエトオサウ] ※ゲットウ

月桃草はミョウガ科植物にして丈七八尺に達す。これを採取するには株元より刈り、葉を切り落とし、表皮を剥き、輪型となし乾燥し、これを割りて諸種の編物・縄・草履・その他細工物に用う。

金針花 [キムチアムホエ]

金針花は金針または金針菜という。ユリ科に属する宿根草にして和名「わすれ草」「クアン草」漢名「萱草」または「忘憂」学名「ヘメリカリスクレヴァ」にしてその花を乾燥したるものを金針という。この植物は山野に自生し、夏に至ればその茎高さ二尺ばかりとなり数花をつく、六弁紅黄にして朝に開いて夕にしぼむものなり。そのいまだしぼまざる嫩花[ノウクワ]を採摘して乾燥し、すべての料理に用う。本島においては、三叉河大安溪の間、す

なわち元の春木阪北部の高地茶園にあり。その葉は月来香の葉のごとし、『図経』にいわく【省略】、『救荒本草』にいわく【省略】とあり、皆これ金針花を言いしものなりという。我が領台後統計書を作るに、この花を百合花と訳したるは誤りなるべし。これがため一内地人、百合花の乾燥せる持ち来たり売らんとせしも、金針と異なるがゆえ大損をなせるものありとの一笑話あり。

文頭菓 [ブスタウコヲ] ※ヒラミカンコノキ

文頭菓は台湾南部地方の山林原野にひろく産する大戟科植物なり。天然生のほかに播種するものあり。生育最も早し。その拇指大となりたるときこれを伐り採り皮を剥き日光に乾かしその縄を製す。水に浸せば堅牢となり挽引力を舛。故に船舶または重荷の運搬用となす。またその皮を水に晒せば色白く苧（※麻の皮からつくった糸）に優るものあり。

林投 [ナアタウ] ※アダン

林投は鳳梨（アナナス。※パイナップル）に似て葉の両側に刺あり。鳳梨に似たる実を結ぶ。しかれども食するあたわず。その葉を細割して繊維を取り、漂白して林投帽・鞆・煙草入等の細工物の原料となす。台湾至るところにあり。新竹より以南に多く、路遍・田畦・溝堤・河岸等ほとんど無尽蔵なり。

旺菜 [オンライ] ※パイナップル（原文では「旺」は「草冠に王」の漢字をあてている）

旺菜一名鳳梨。英語にて「パイナップル」、印度語にして「アナナス」という。葉灰色にして一見万年青に似たり。葉の両側に刺ありて一見林投のごとし。雌雄草あり。雌草に実結ぶ。甜瓜大にして外形松子（まつのみ）のごとく皮を剥きて食す。その味酸にして美なり。ゆえに「松林檎（パイナップル）」の称あるゆえんなり。今鳳梨会社ありて盛んに缶詰を製し販売す。台北・北投・新竹・新埔・台中・員林・台南・鳳山等に多し。これもと山地赤瘦なるところに植え、よく繁茂し、三年後の七八月頃実を結ぶ。南部においてはこの畑を旺菜宅という。その葉より旺菜繊維を取り、布に製す。

煙草

煙草は本島在来のものありしが、専売制以来多く改良種を栽培す。北中南部至るところに栽培す。苗栗の馬那邦および嘉義県下等は地味その栽培に適せりという。また蕃地には蕃人至るところに栽培して吸用す。

籐 [キエヌ]

籐は本島至るところの蕃界に多し。これを採り椅子・床・行李等その他種々の器を造る。器堅固にして持久力あり。

芋藜 [コアチヌ]

はと芋藜我が薄（すすき）をいう。土人これを採りて薪となし、また籐（※境界）・壁・屋根等に用ゆ。蕃界に至れば径一寸・長さ一丈に達するもの繁茂せり。

蘆竹 [ロオチエク]

蘆竹は我が蘆なるも、常夏をもって数年枯死せず。ゆえに径一寸・丈（たけ）け一丈に至り、一見竹のごとし。土人呼んで蘆竹という。また故なきにあらず。

鶏屎籐 [ケエサイチエヌ] ※ヘクソカズラ

鶏屎籐とは一種の蔓にして土人これを煎じて呑むときは熱を去るという。

葉下紅 [ヒオエエアヌ] ※ウスベニニガナ

藜（あかざ）に似たる丈三四寸の葉の裏紫色の草なり。生にて碎き腫物に塗れば効ありという。

莧菜 [ヒエヌサイ]

莧菜は一見鶏頭 [ケエトウ] に似たる野菜にして三種あり。一は土人の普通畑に作るものと、一は野生の棘ある棘莧菜と称するものと、一は同じく野生にして赤莧菜と称するものとの三あり。土人これを豚油にて「イタメ」て食す。その味あたかも内地の藜（あかざ）のごとし。土人いわく、鼈（すっぽん）の肉と煮るときは食後肉生化するという。

なおこのほかに、種々なる草類あるといえども、内地のものと同じなるをもってこれを省略せり。

第三節 竹類

竹は台湾に至るところにあり、そうして最も多きは南投・嘉義をもって第一とす。その種類左のごとし。

荊竹

荊竹は叢生にして荊あり。多く人家の周囲に植え風防および籬（※境界）の代用をなす。この竹は肉厚く穴症にして根および枝はほとんど肉のみにして穴なし。質硬きをもって家の柱桷（※柱）・天秤などに用い、筍は味苦くして美ならざれども、塩煮として食用となす。全島至るところの人家の周囲および田畑等を囲みいるものはすなわちこの竹なり。

梧竹

梧竹は嘉義地方および阿里山および林杞埔（※現在の南投県竹山鎮）等に最も多し。散生にしてほとんど野生的に数百甲歩にわたるところあり。その太さ径三寸くらいにして丈長く、本島人の有名なる竹細工はことごとくこの竹を用う。また筍は美味にして食用に適し、その嫩（若い）なるものを用いて竹紙（本島人これをもって金銀紙を製す）を製す。

麻竹

麻竹は嘉義および斗六方面に多し。叢生にしてその大なるもの径八九寸に至る。台湾中南部においてはこの竹の太きもの十四五本をもって筏を作る。海上の漁人皆これを用う。また筍は美味にして食用に適し、この筍をゆで横に切り細き糸となし乾燥して料理に用い、また対岸に輸出す。

緑竹

緑竹は麻竹に似て葉濶（ひろ）くして叢生す。この竹は多く筍を採取するの目的をもって栽培するものなり。

長枝竹

長枝竹は総べて荊竹に似たるも荊なし。人家の周囲および作物の風防とし、かたわら筍を採取するを主とし、また細工等にも用う。

簍殼竹

これまた長枝仔に似て人家田畑の周囲に植え風防となし、また種々の細工にも用う。

人面竹

人面竹はすなわち内地の布袋竹にして釣竿または杖、煙草等に用う。

猫児竹

猫児竹は内地の孟宗竹にして、嘉義阿里山山麓、龍眼林（※現在の南投県中寮郷）附近に多し。

観音竹

観音竹はただ観賞用にして公園または庭園等に植うるものにして、葉小にして丈矮（ひく）きものなり。

鳥竹

鳥竹は内地の胡麻竹にして土人煙管または杖等に用う。